文章・文体

遠藤好英

はじめに

五三年、五四年の二年間に文章、文体に関する著書が、十余冊刊行された。これほどの量の公刊は珍しい。しかも、その内容には文章研究の一つの到達点の意味が考えられ、同時に論文と合わせて、新しい時代への転換期に入ったことが推察されるのである。以下、単行本、論文の順で内容の紹介を中心にした展望によって、この期の特色を浮び上がらせることを試みようと思う。

一　単行本

文章論、文体論、史料集、論集などと多様な内容になっている。

①市川孝『国語教育のための文章論概説』（教育出版、昭53・9）は、第一章文章論と文章指導で、国語教育への文章的指導についての留意点を考え、第二～六章でそれぞれ、文章と文章の分類、文脈展開の形態、文から文へ、段落と段落との関係、文章の構成と、文章論の研究分野について述べ、第七章文章表現の様相では、表現や文体の問題が文章指導の際の有用性を考慮して扱われている。昭和三二年以降、文章の展開について、その論理構造を考え続けられてきた市川氏の現代の文章を対象とした研究の体系が示されている。

②樺島忠夫『日本語のスタイルブック』（大修館、昭54・4）内容は三部から成り、Ⅰ表現のさまざまでは表現変異が言語行動時の条件のゆれ、特にも表現態度に左右されて生ずることを論ずる。谷崎の作品について、描写の度合が薄くなるのは叙述の目を設けたり、語りの形式を採ったりして言葉の特性を生かそうとしたからだと説く。Ⅱ文章構造では、文章の構造・生成を意図・意味・文脈の切れ続きの各構造が、重なってできると考える。Ⅲ言語行動と表現では、名詞の比率が大きい文章は要約的な文章であるなど、理解・表現の構造が考えられている。Ⅱの所で説明の型を考えるが、型を見つけ、生成のために「よくできた説明文に限り、分析、記述」する必要があると述べる。最も身近かな説明の文章についてさえ、このような留意が必要なのである。文章研究の道のりは全く遠い。

③中村明『名文』（筑摩書房、昭54・3）一名文論、二名文の構造に分かれる。「多様な名文をならべてそれぞれの性格を示すことが名文論のおもな仕事」とする中村氏は、名文の真価は文章にただよう雰囲気と、そこから生ずる感動の質にあると考える。受容主体が深く係わるためか、近現代の作家五〇人の文例について、その言語的性格を析出し、表現面に反映したかぎりでスタイルの構造をつき

とめようとしたのであるが、スタイルの構造は、一文ごとに違うものだけで終った。

文章論、文章心理学では、およそ扱うことのない古典文学作品について、語学的にその文体を論じた最初の研究書が現われた。④西田直敏『平家物語の文体論的研究』（明治書院、昭53・11）がそれである。昭和三四年の一篇を含む四二年以降の論文を軸に、一書を成している。理論篇と実践篇とを具備した意欲的労作である。「コミュニケーションにおけるメッセージ（テキスト）の言語的様相の解明を表現主体（発信者）による表現手段の選択という面から行おう」として、著者は語り本平家の完成した姿「覚一本」について、三部構成で論を展開する。文体基調論で、品位を保ち節度ある表現への志向と、物語ろうとする叙述態度、さらにあるべき姿を描こうとする傾向を指摘し、文体組成論では、和漢混淆文が和文体を主とすることをその基幹語彙を中心に考える。文体様相論では敬語表現の様相を明らかにする。自敬表現に力を注ぎ、天皇のことばにふさわしい統一的性格は、文体基調の一つの現われとして捉えられることを述べる。さらに、文章展開手法として、対比的構成、補注（足）的、道行的各展開を取り上げる。特異構文として、（題目）は（物語）型構造の表現形式や理由説明形式などについても論じている。各論の中で、様相論が全体の五五・三%の頁数を占めて多い。具体的実質的論考に比重が置かれているとわかる。本書によって、平家物語の表現の性格がかなり明らかになった。しかも十分とは思えないのは、平家の大きさや語りの性格上、表現主体が単一の存在と言えないことなどが関係していよう。が、さらに、文体が「分析結果を総合することによって」明らかになるという時の総合ということが、自敬表現の場合を除いて明確でないことにもよると思われる。組成論として取上げられた語彙にしても、和文語、漢文訓読語の二面からのアプローチだけで、記録語を考慮しないでよいのだろうかと思われるのである。本書が古典の文学作品の文章研究に多くの示唆を与え、指針となることは疑いない。

最初の成果ということは、次の史料集についても言える。同一人による次の二書である。⑤山本正秀『近代文体形成史料集　発生篇』（桜楓社、昭53・3）、⑥『同　成立篇』（同、昭54・2）、この二書については、すでに本誌百二十集で飛田良文氏によって紹介ずみなので省略する。ただ、心しなければならないのは、この、学会へのすばらしい贈物が内容としてもつ文体意識（観）史が、そのまま文体史ではないことである。文体を支え、成立させる条件や事情などについて、教える所を十分に活用したいものである。

これも初めての成果といえる著書がある。⑦大類雅敏『文体としての句読点』（栄光出版社、昭53・4）である。我国の句読法は言文一致体とともに成長したが、文章研究に取上げたのは波多野完治氏で、安本美典氏は句読点間の距離を文体的特徴とした。本書では句読法を、文法的と修辞的とに二分する。後者は、句読点の審美的価値や側面で、文体を考えさせる根拠であるとする。ついては、本書の内容は、文学研究としての句読法の分析をするについての基本的考え方や方法を、釈迢空の歌などを例に説いているのである。

この二年間の史的意味を象徴するかのように、文章研究の論文を編集した本が出た。⑧山口仲美編『文章・文体　論集日本語研究8』（有精堂出版株式会社、昭54・4）である。

本書は、二四篇の論文を四分類し、文章篇七、文体篇十二、表現

論三、シンポジウム、文章作法一の構成で収めている。論文は「文章・文体に関する理論的研究と、現代日本語の文章文体を対象にして行った研究のなかから」選ばれたものである。論文のあとに、山口氏の総合的な解説が付けられている。その述べる所は、昭和期の研究の歴史と現状を踏まえて問題点に及んでいる。

研究の始まりが最も早い文体論から始まって、現在の問題点と克服のための考えとが次のようにまとめられている。文体論では「語学的文体論と文学的文体論の対立」が問題で、「両者の統合の可能性に挑戦する」ことが大切であると訴える。文章論では、国語学上の位置づけ、文法論との関係、文章の展開について線状的とらえ方に加えて、空間的同時的把握、国語教育との関係などの問題があり、文章論を深めるためには「個々の文章の実例に即して」、考察し、「たえず一般性、傾向性の有無を問ひ続けて行くこと」が必要であると説く。表現論は、在来の表現過程の研究に加えて、理解過程に関しても必要だと述べる。時宜に叶った編著であった。現代語に加えて、近代以前の文章文体研究についても同様の編集が望まれる。

以上の外、数年来の傾向を受けついで文章作法書の類が多い。

二　論文

(1)理論的研究　(2)歴史的研究とする。

(1)(イ)　一般的総合的な論

文章論自体の反省吟味を内容としたものに次の諸論がある。①林四郎「修辞学と文章論」(『月刊ことば』、昭54・1)、②毛利可信「語用論と文章論」(『言語』、昭53・5)、③甲斐睦朗『文章論、その構想と問題点」(『国語国文学報』、昭53・3)、④島田勇雄「文法論と修辞論との間――「トロッコ」の表現に関連して――」(『解釈』、昭53・10)である。

①は文章論が大きなまとまりを単位と扱うようになり、修辞学に学ぶ点が多いと述べる。同じ林氏の⑤「文章の伝達論」(『言語』、昭53・5)文章の完結性を測る尺度が言語内に止まらず、諸種の条件がからむ。その一の伝達機能の条件について、文章能記・所記に表現者を加えた三側面に分けて観察した。②は「AならばBである」形式の文が警告や忠告の文として機能する時のメカニズムを話者聴者の心理過程を入れて考えた。③④は、文章論への期待をこめて構想する点で共通する。甲斐氏にとっては「言語作品を解釈するための方法や観点などを提供する理論体系」であり、島田氏にとっては「国語教材の読解に役立つ」のが文章論なのである。

以下は啓蒙的な論である。⑥波多野完治「文章のスタイルについて」(『月刊ことば』、昭53・8)は文体に二種を認め、文章心理学が両者の究明を目的とすると述べる。⑦安本美典「文章上達の心理学」(『言語』、昭53・5)では、アメリカにおける研究を踏まえて、文章の読みやすさはセンテンスの長さと用語のやさしさに関係し、文章の興味の度合いが「人間的関心」に富むかどうかによることを紹介する。『言語』(昭53・3)は以下の論をも載せている。⑧寿岳章子「文章のおもしろさ」、⑨芳賀綏「文章について」、⑩稲垣吉彦「文章の実用性」――内容は、広報紙が読み手に納得してもらえるために、知らせる側は相手の実用性にピントを合わせた文章を書くことを訴える。⑪槌田満文「報道文章の限界」も、記者と読者に限界の再認識を訴える。

(1)(ロ)　各論的個別の問題を扱った論

文章の構造を考えるものに⑫樺島忠夫「説明文の構造」(『論集日

本文学・日本語』（以下に『論集』とする）5 現代　角川書店、昭53・8）がある。理解がうまく成り立つように構成しなければならない説明文の、実用に即した効果的な型を教材を例に考え、その構造を記述する方法を示した。説明文について、実用性を強調すると説明書きと混同すると、注意を喚起するのは、⑬渋谷孝「説明書きと説明文――説明的文章の属性をめぐる一考察――」（『宮城教育大学国語国文』、昭53・4）である。同氏の⑭「説明的文章の世界の自律性の特質――教材論の立場について――」（⑬に同じ。昭54・2）は、学習者の立場に立って、情報の質と量、内容を決めるべきだと説く。

⑮安達隆一「文章の内的時間構造 (四)――文章の統一原理を求めて――」（『解釈』、昭53・2）は文章の冒頭の時の表現が連体修飾となるか連用修飾になるかで、続く時の表現の位置と表現形式とは文章の内的時間を違わせると説く。⑯此島正年「引用――文構成上の機能――」（『湘南文学』、昭54・3）は、引用句の内容が上代から現代までにわたって、地の文との融合例など種々あるのを示す。⑰宇野義方「文章の始めと終りの型」（『国語と国文学』、昭53・8）でも、古代から現代までを見渡して、文章の始めと終りの型の消長を概観し、「いつ、どこで、だれが」の順序は容易に破れない固い型であると考えている。

表現に関する論で文脈を考えているのは、⑱原田芳起「語彙と表現の間」（『障陰国文学』、昭54・10）で、語の具体的な意味内容を定着させるのは文脈で、文脈が表現する場面であったことを述べる。なお、『国立国語研究年報30』には、「現代語の表現の文体論的研究」が「広く現代の日本語の表現力を確認するところに最終目標」をおいて行われていると報告されている。報告者の中村明氏の、⑲「『おみくじ』の文体論」（『言語生活』、昭54・8）は、おみくじの文章の「スタイルをスケッチ」したものである。

(2)　歴史的研究

内容上、一般的問題を扱う場合や作品単位に考えるものなどあるが、一括して時代順に扱おうと思う。

(イ)　古代の論では⑳奥村悦三「仮名文書の成立以前」（『論集』1上代、昭53・1）が、正倉院の甲文書を扱い、この文書の背後に漢文の文書が範例として存在したことを考えた。㉑半沢幹一「上代の比喩表現について――「共通性」と素材との関連から――」（『国語学研究』、昭54・12）は、たとえるもの、たとえられるものをそれぞれ使用材、対象材とし、個々の例の材を自然物・人間・動物・植物などに分け、使用材、対象材の共通性の関与する内容を属性と動作とに分けて、両者の関係について傾向性や類型性を指摘した。

仮名文の性格に新しい知見と見通しを与えてくれた論がある。㉒山口仲美「平安仮名文における朧化性の問題――源氏物語を中心にして――」（『国語学』、昭53・3）で、朧化性を実現する言語的特色を省略と、接頭辞もの、け、そらの使用など表現の仕方に求めて概観し、朧化の効果をもつ二重否定の系譜を伊勢から源氏へと辿れるのではないかと述べる。㉓吉岡曠「物語の冒頭」（『学習院大学国語国文学会誌』、昭54・3）、㉔石田穣二「物語の大尾」（『文学論藻』、昭54・12）も、文章の展開を考えるのに資する。㉓は「今は昔の物語」から「今物語」への転換は、源氏物語で「実質的かつ自覚的に果された」とする。㉔は、枕草子三巻本の跋の末にみえる「とぞ本に」の形を基本とする結びの形式を、物語や広く書物の大尾であると説く。以下は作品単位の論である。㉕小泉道「『日本霊異記』の

文章管見――「時」に関する記述をめぐって――」（『論集』1上代、昭53・1）は、時に関する表現〈先―後〉が〈―後―〉を含めて、編者の景戒が読者を因果世界に導入するため、意図的に採用した様式であろうとする。撰述意図との深い関連で文章を捉え得ていて説得力をもつ。同じ霊異記について、㉖松下貞三「『日本霊異記』における漢文和化の問題」（㉕と同じ）は、語序、返読、敬譲の補助動詞「奉・賜」などによって和化の実態を考えた。形式面の特徴とその意味とを緊密な形で論じたものに、㉗塚原鉄雄「伊勢物語の構成原理――文章論的な作品研究――」（『国語国文』、昭54・6）もある。鎖型構文や挿入構文と助動詞「けり」などで、伊勢の「文体の特性は、実質的断絶を形態的連続で実現するもの」と考えている。同氏の㉘「伊勢物語の冒頭表現」（『文学史研究』、昭54・8）は、伊勢の文体を支えた断続的連続性の志向が、冒頭表現にも考えられるとする。㉙穐田定樹「『御堂関白記』の引用形式」（『大谷女子大国文』、昭54・3）は、記録の文章を考える基礎を提供してくれる。〈誘導語―引用部―結尾語〉を引用の叙述とよび、その三要素ごとに諸形式をあげ、〈去―者〉型が最も多いことなどを指摘する。㉚遠藤好英「記録体における『朝』の語彙――『後二条師通記』の場合――」も、記録の文体を語彙によって明らかにしようとする基礎作業である。引用に関して、㉛木野佳代「『和泉式部日記』における消息文」（『金城国文』、昭53・2）には、消息を受ける形は「とあり」が最も多く、他に「ときこえつ」「との給へり」や歌で終る場合があるのを指摘する。㉜多屋久栄「『狭衣物語』における女性の描写について――語彙的観点から――」（『樟蔭国文学』、昭54・10）は、女性を描写する語の内容を多面的に捉えようとしている。

(ロ) 中世の論では㉝久山善正「『方丈記』〈大地震の段〉の表現について」（『論集』3中世、昭53・6）が、作者の長明の体験との係わりで文章の表現効果を考えたもの。㉞佐々木巧一「道行文と歌枕――今様から「平家」への発展――」（『野州国文学』、昭53・10）は、平家の海道下りの道行文を、梁塵秘抄の八首の道行と比べ、平家が古典の歌枕を多く取込み、太平記の道行文の型をすでに作り上げていると説く。㉟福田益和「『古今著聞集』の研究――助詞『の』・『が』の用法（上・中・下）」（『長崎大学教養部紀要人文科学』、昭53・54）は、「の」の下接の形式名詞を分類して「のこと」が圧倒的に多く「文体的基調をなしていることが看取される」とする。

㊱伊藤博之「法語における散文意識――親鸞の場合を中心に――」（『日本文学』、昭54・4）は、仮名法語が思想の在り方と不可分の文体で、親鸞の文章に論証性と説得性を主眼とした中世散文の達成があるとする。「知るべく（となり）」や主題の提示文「それゆゑは」「しかれば」などの意味が考えられている。㊲秋本守英「『徒然草』の表現」（『論集』3中世、昭53・6）は、叙述を統括する部分の「ものなり」に代表される作者の認識が、表現形態と相即していることを丹念に跡づけて、徒然草の文学作品としての統一性を求めている。㊳下河部行輝「太平記の文章――会話導入形式をめぐって――」（『秋田国語学研究』、昭54・10）は、平家の「～く」形式が鎌倉以降「～ける」へと移り、軍記物の特徴となることを述べる。

(ハ) 近代に関しては、他の時代と比べ最も多い。大きいテーマで考えたものに次の二篇がある。㊴篠田一士「韻文から離脱した近代の散文」（『日本文学』、昭54・4）と㊵木坂基「欧文脈の消長」（『言語生活』、昭54・11）とで、㊴は、文学作品における近代散文は江

戸散文に効力を発揮した聴覚的なものを排除し、視覚的なものを支えにして成り立った、それは日常言語に接近するという使命を実現することであるという。㊵は、「欧文的表現要素が」「文章の近代化を揺り動かしてきた」「その辺りの事情を、小説の文章を中心に概観し」ようとしたものであるが、抽象的な説明にぼかされたのが惜しまれる。

言文一致に関する㊶中島国彦「言文一致・写生・描写――二葉亭・藤村と散文の意識――」(『日本文学』、昭54・4)は、文学者の意識と時代との係わりに散文の問題を考える基礎をおくことを提唱する。以上の論と対照的に、語学的に言文一致を考えた㊷塩沢和子「言文一致体の成立――演説速記の果した役割――」(『上智大学国文学論集』、昭54・1)は、演説速記が言文一致体の土台になったとする仮説を助詞・助動詞について吟味したもの。丹念な調査比較であるが、仮説を立てる条件が十分なのかに疑問が湧く。㊸岡本勲「北村透谷の詩と論文――文体のゆれについて――」(『論集』4近世・近代、昭53・7)は、表現内容と表現様式との関連性を考察する一連の作業中の一篇である。文学のジャンル別に分けた表現内容を、回想完了の助動詞「き・けり・ぬ・つ・たり・り」の意味用法との関連で検討した。「たり・り」は論理的文章に多く、文芸的文章には逆に「けり・ぬ・つ」が多いことを突きとめ、その意味を考えた。㊹木坂基「明治文語としての『たけくらべ』のことば(一)――題名の性格と意義について――」(『解釈』、昭53・7)は一葉の文章に対する評「雅俗折衷体」の意味を題名「たけくらべ」について考えた。

㊺遠藤好英「有島武郎の手紙文の文体――その種類と史的変遷――」(『日本文学ノート』、昭54・2)、㊻「㊺に同じ――種類とその性格　上・下」(『宮城学院女子大学研究論文集』、昭54・6、12)は、指摘された六種の文体について、㊺は口語文体が最も多いが、明治末年までは候文体が一番多いと指摘し、㊻は、それぞれの性格と意味とを、筆者の有島と宛てた相手との関係を考慮してまとめた。

以上の外に、作品作家の個性的文体に関する論がある。

㊼菅野圭昭「『銀河鉄道の夜』の文体分析――換言および逆接の表現――」(『解釈』昭53・10)は、表現の意味を芸術観・発想の現われと考える。㊽尾地百々樹「室生犀星『あにいもうと』の文体における粘着性について」(『大阪教育大学国語と教育』、昭54)は、粘着性の由来を、作品世界や表現態度、文章展開、文形式、修辞のそれぞれについて考察した。㊾本城ゆかり「近代作家の文体――長塚節と写生文――」(『国文目白』昭54・2)、㊿北川典子「岡本かの子の小説の文体について――林芙美子との比較――」(『大谷女子大国文』昭54・3)の二篇は、ともに数量の調査を内容とするが、㊾は、節の写生文を「主に名詞に拠って筋の展開をはかろうとし」、動詞が多く「動きを表出する文体」とする。㊿は、かの子の文体を「やわらかで、流麗で、華やかな印象を与える文章である」とする。

上代の項に次の一篇を追記したい。(20)小谷博泰「宣命の記源と詔勅――上代における漢文の訓読に関して――」(『訓点語と訓点資料』、昭54・3)宣命の起源についての小谷氏四六年以来の説を補強する論である。漢文体の詔勅が宣命に類似する事実から、宣命を翻案して成立したろうことを考え、中国の詔書へと溯ることを推定したものである。

むすび

文章研究は、現代の文章を扱う時と近代以前のそれを取上げる場合との両者の間で大きな隔たりがある。同じ方法が適用できないほどの対象の質的差があるからである。

現代文章を扱う一般的研究については、その機能役割や表現意図が捉えやすく、理論的整備も進み史的考察に向う態勢ができてきた。個別的研究は、文体論の形で文学作品の主体的なものを作者に関して考えるものが多い。これは従来からの傾向であるが、より一般的類型の研究への流れも指摘されるのである。

一方、史的文章を対象とする研究は、類型的文体研究が少なく、表現意図や編纂意図などを手掛りに主体的なものと言語形式との相即を考える所に最近の傾向がある。これは文章研究の目的である文章の統一原理を明らかにしようとする意図の反映であろうが、個性的文体論の史的文章への適用と考えられる。その背景はどうあれ、研究対象それ自体の中に沈潜することの大切さを銘記したい。こうした個別的観察を踏まえて類型を求め、一般的性格を抽象し、相互の関係を明らかにすることが古い時代の文章研究にとっては必須であろう。それは文章史の構築につながるものである。

怠慢による未見の論も数多く、言及すべきを漏らしてもいよう。取上げたものについても舌足らず、的外れもあろうことを畏れる。至らぬ点については各位のご寛恕をお願い申し上げる。

——宮城学院女子大学教授——